

AR
CA
DIA

69
WINTER 2017

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース
[アルカディア]



MI
OKAZAKI
MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術博物館

眼の極楽⑱ 花と鳥のかたち

館長 榊原悟

四季花鳥図の花鳥

狩野元信(四七六?~二五五九)の「四季花鳥図」と云えば、誰もが思い浮かべるのは白鶴美術館のあの屏風であろう(図1)。画面全面に金箔を押し(貼付した)、金色燦然たる金屏風である。そこに胡粉、朱、丹、緑青、群青などによって花と鳥を描く。華麗な画面の割には思いのほか少ない色かずだが、これに墨の黒色を加えた色彩こそは日本絵画の基本色。それらが金箔に映じ、画面はあたかも寶石箱をひっくり返したように輝く。屏風と云う大画面も、そうした絢爛たる味わいを、否が上にも高める。右隻右端、左隻左端下部にそれぞれ入れられた落款に、

狩野越前法眼元信 生年
七十四歳 筆

とあるところから狩野元信七十四歳、天文十八年(一五四九)の制作と判明する。ただし本図が納められた箱の箱書により、七十四歳を天文十九年とする説もある(その場合は生年一四七七年)。その違いはわずか一年、いずれにせよ図が元信の基準作であることに変わりはない。この時代の狩野派の制作の常として、彩色を弟子たちに分担させ完成したのだろう。

しかも図は、この後、安土・桃山時代の画壇を主導した狩野永徳(一五四三~九〇〇)や、その子光信(一五六〇/六五~一六〇八)、弟子の山楽(一五五九~一六三五)らによって大輪の花を咲かせることになる金碧障屏画の、まさしく現存する、もつとも早期の作であった。白鶴美術館本・金屏風の史的重要度は計り知れない。

だが、その価値は、決してこれに留まるものではなかった。さらに遡れば、遠く平安時代以来のやまと絵の流れにも沿っていた。

面白い例がある。北宋末期の皇帝徽宗(一〇八二~一一三三)の宣和内府に秘蔵されていた「倭画屏風三」である(「宣和画譜」巻第十二)。三点の屏風の内訳は「海山風景図」「風俗図二」であった。そのうちの二つは永観元年(九八三)、北宋へ求法の旅に出、後に三国伝来の栴檀瑞像、あるいは生身の如来像として人々の信仰を集めることになる釈

ESSAY

迦像(現・嵯峨清涼寺本尊)を将来した齋然(九三八~一〇一六)が、帰国後の永延二年(九八八)、弟子の嘉因らを改めて宋に遣わした際、太宗への感謝の表文と共に貢ぎ物とした屏風であった。その屏風について『宋史』日本伝には「倭画屏風二雙」つまり二隻であったと云うから、常識的には「宣和画譜」に云う「風俗図二」こそが、それであろう。

注目すべきは、それらの「倭画屏風」に対して論評した「宣和画譜」の言葉だ。その絵は、「其国風物山水小景」を写した、いわゆる景物画であったようだが、それらはすべて、設色甚重 多用金碧 考其真未必有 此第欲綵綵然以取觀美也

と、「觀美」すなわち金の多用や派手な彩色を伴う見た目の、敢えて云えば工芸物な美しさに満ちた絵であったと伝える。もちろんこれはあくまで北宋の人びとの眼が下した「倭画」評に過ぎない。だが異国の眼であるだけに、自他の差別化には敏感であったはずで、かえって「倭画」の特質を言い当てているのではなかったか。その論評に「設色」と「金碧」の語を以てしているのは実に興味深い。白鶴本「四季花鳥図」の華美な味わいに平安時代以来の、その「倭風」のDNAと云うか、「觀美」の伝統を見ることは、さして難しくないだろう。

そう云えば室町幕府の御用絵師として、足利義尚(一四六五~八九)や日野富子(一四四〇~九六)ら貴紳たちの俗体画像の制作を命じられた始祖正信(一四三四~一五三〇)以来、有職故実に通じ、やまと絵の技法に習熟することは、漢画||唐絵を基盤に置く狩野派の絵師に求められた必須の要件であったはずだ。正信もそのために、制作に際しては三条西実隆(一四五五~一五三七)らに意見を仰ぐなど、努力を惜しまなかった。その結果、狩野家は、

漢而兼倭者

と位置付けられ、さらに正信の息子元信に至っては、

彩墨尽其美 和漢得其宜

と、倭画と漢画、二つの画法に通じていたと云う(引用は、いずれも狩野永納『本朝画史』より)。白鶴本「四季花鳥図」金屏風は、その元信の、そして狩野派が蓄えた和漢の

画技の力を十二分に発揮したもの、と称してよいだろう。

となるとその画技によって描き出されたのが何であったのか。むろん、わたしたちに
関心があるのは、あくまでモチーフ、取り上げられた花と鳥が、何であったか、にある。
そこで改めて図を一覧する。描かれた花と鳥たちの主なものを挙げてみると、次の通
り。

右隻(春夏)

孔雀

白鷺・小禽

松・桜・紅梅・躑躅・春草

牡丹・竹(竹の子)・緋扇

左隻(秋冬)

錦鶏鳥

鴛鴦・鴨・小禽

楓(紅葉)・芙蓉・秋草

松・椿・白梅・雪

これらを画面全面にちりばめる。その図様構成の方式に、元信は定型を編み出した。そ
れは、屏風両隻を横並びにした際、画面の左右両端に近景を片寄せて大きく密に描
き、そこに松や桜などの巨樹を配し、そこから画面中央へ伸びた幹枝に沿って、主に水
辺のモチーフを中景から遠景として、やや疎らに展開させたもので、図様の大小と配置
の疎密とによって画面に奥行を与え、同時に、画面両端に重心を置いた、きわめて安
定感のある構図を実現した。これ以外に元信は、天文十七年(一五四八)にも、こうした
図様構成の典型を、屏風五双と二隻分の小下絵によって示すと共に、「花鳥図」が取り上
げるべき鳥や獣の姿も描き遣して呉れていた(『花鳥図屏風小下絵図巻』図2)。それ
らを含め、前掲した白鶴本のモチーフを二見、即座に思い出して欲しいのは、「定家詠十
二ヶ月花鳥和歌」で詠まれた花と鳥である。十二月の「早梅(白梅)」と「水鳥(鴛鴦)」、二
月の「桜」を除けば、両者に取上げられた花鳥で共通するものは、ほとんどない。
「定家詠」の花と鳥と云えば、わたしたちの先祖の眼と歌(雅)の心が選び抜いたモ
チーフであることは既に述べた。白鶴本に描かれた花と鳥は、それらと重なり合うこと
がないのである。この事実はなかなか重要で、となると、これらのモチーフは、どうし
て選ばれたのか、当然の疑問だろう。

そのことを考える上で手掛りとなるのは、両隻のそれぞれ主役として大きく描かれ
た孔雀と錦鶏鳥とは、ともに舶載されたものであった、と云う点だろう。

その孔雀である。推古天皇六年(五九八)秋八月新羅が一隻(羽)を貢ぎものとしたこ

ESSAY

とが、現時点で確認できる最初の渡来のようなだが(『日本書記』
卷第二十二)、それを見た天皇は、その余りの美麗さに訝(いぶか)
さを感じたと云う(『扶桑略記』三推古)。以来、「人のいふらん
ことをまねぶらん」(『枕草子』)鸚鵡と共に孔雀の舶載は、しば
しばであった。飼育も可能であったからだろうか、藤原道
長(九六六〜一〇二七)も、その孔雀を飼っていたらしく、長和四
年(一〇二五)四月十日には何と卵を生んだと日記に記している
(『御堂関白記』同日の条)。当時このことは貴族たちの間で話
題となっていたようで、雌雄番でもないのに卵を生んだことへ
の不審から、孔雀は雷鳴を聞いたときや、水面に映した自分の
姿を見た折に、卵を生むとの俗説があったことを伝える(藤原
実資『小右記』同年四月十一日の条)。

舶載された高価で珍奇な鳥、しかもその美麗な姿に富貴な
味わいが深い——そんなイメージが孔雀にまつわる、それでは
なかったか。まさしく「唐めきたる」鳥の代表であった。むろん
『小下絵図巻』(図2)に描かれた麝香猫もそれだろう。当然、
そんな鳥であれば、季節感を伴うはずもない。にもかかわらず
ず、春の、桜の花咲く下に孔雀を置いた。「桜には雉子」の「定家
詠」の翻案だろう。元信の和漢兼帯は、単に技法に係わるだけ
ではなく、こうしたモチーフ選択にも及ぶものか。いや、結論を
急ぐことはあるまい。画面に絢爛と咲き匂う花ばなの氏、素
性、その由緒を、改めて尋ねてみる必要があるだろう(未完)。

今回よりエッセイのタイトルを表記のように変えました。
しかし、内容そのものは前回までのそれを承けたものです。
引き続きご愛読ください。



図1「四季花鳥図屏風」狩野元信筆 白鶴美術館蔵



図2「花鳥図屏風小下絵図巻」部分
狩野元信筆

美術博物館が所蔵する古い生活道具を中心に紹介する展覧会「暮らしのうつりかわり」の季節となります。今年度で五回目を迎えます。いつもは収蔵庫でガラクタと挪揄され肩身の狭い思いをしている、働き終えた道具たちの年に一度の晴れ舞台であります。

かつて身近にあった伝統的な生活道具は、便利で快適な生活とひきかえに、古くさく不便なものとして影をひそめ、私たちのまわりから姿を消していきました。今では全く見かけない道具もあり、素材や形が大きく変わったものもあります。この会場にある道具たちは、いずれも長い間大切に使われてきたモノたちで、多くの方々から岡崎市へ寄贈していただいたものばかりです。このような身近な暮らしを伝える郷土の資料を岡崎市の財産とし、みなさんに公開して後世へ伝えることを目的とした展覧会でもあります。

また、公立小学校三年生が、むかしの道具や生活について調べる社会科の学習「古い道具と昔のくらし」への支援を兼ねています。子どもたちにはむかしの道具の実物を間近に見て

もらい、むかしの人たちが道具を大切に使用してきたというを感じてもらいたい、そして、道具の観察を通してむかしの暮らしの様子を探り、今の自分たちの暮らしを考える手助けになればと考えます。

本展は大きく『暮らしの道具』『小学校の道具』『ひなまつり』の三部門に分かれています。

『暮らしの道具』では昭和三〇年代の「茶の間」風景を再現し、明治から昭和時代にかけてのいろいろな生活道具を「せんたくとお裁縫」「台所の道具」「食卓の道具」「あかりの道具」「暖房の道具」「住まいの道具」など小テーマを設定して紹介します。さらに、今回は一昨年に寄贈されました染付古便器のコレクションを紹介する「お便所」のコーナーがあります。明治・大正時代に人びとを魅了した陶磁器製の便器。トイレの道具までも染付の藍で美しく装飾してしまった日本人の美意識と、それを手がけた職人の技術と心意気とともに、染付古便器の魅力を知っていただきたいと思えます。

『小学校の道具』では、明治から昭和戦前にかけての教科書(国語・算

数・理科・社会・修身・音楽・図工)をはじめ、掛図、算盤、足踏み式のオルガン、給食の道具、運動足袋などを展示します。子どもたちにとって小学校は現在進行中であり、生活とは切っても切れない関係にあります。誰もが体験している学校生活を振り返りながら、楽しくご覧いただければと思います。

そして、時節柄恒例となりました『ひなまつり』では、子どもの誕生を祝い、その成長や幸せを願って飾られたおひなさまや素朴な愛らしさの土人形を展示します。享保雛、昭和初期と三〇年代の御殿飾り、昭和四〇年代の屏風七段飾りのほか、土雛や近畿地方と九州地方の土人形などを紹介します。

むかしの道具には、人びとが長い年月をかけて築き上げ、受け継いできた生活の知恵と工夫がいっぱい詰まっています。古い道具からこうしたことを感じ取り、今の私たちの暮らしを振り返ってみましょう。懐かしかったり新しかったり、受け止め方は世代によつて大きく違うはずです。ご家族で語り合いながらご覧いただきたい展覧会です。

EXHIBITION

収蔵品展

暮らしの うつりかわり

伊藤久美子



御殿飾り(昭和6年)

会期：平成29年2月1日(水)～3月26日(日)

企画展

京都市美術館名品展

京の美人画100年の系譜

内藤高玲

岡崎市美術博物館では、「京都市美術館名品展 京の美人画二〇〇年の系譜」を四月八日から五月二十一日まで開催します。

京都の芸術の伝統と活発な制作環境を背景として明治四十二年に開学していた京都市立絵画専門学校校長であった松本亦太郎は、学生たちに花街を描くことを盛んに勧めたといえます。女性を画題とした「美人画」が京都画壇を中心とした関西で多く描かれることになった一つのエピソードです。

女性を題材とした女性像については、古くは縄文時代の《土偶》から始まり、古墳時代の高松塚古墳の壁画に描かれた《女子群像》や奈良時代の《鳥毛立女屏風》なども見られ、平安時代の《引目鉤鼻の容貌の女性像》、そして江戸時代には菱川師宣の《見返り美人》や、鈴木春信や鳥居清長などの女性を描いた浮世絵が好評を博しました。

明治末期から定着した「美人画」は定型化してしまっていた従来からの「美人像」とは異なり、新しい女性像を提案するもので、写実のみとらわれるのではなく「女性の中の美

EXHIBITION

が様々な方面から描かれています。明治後半以降に顕著となった国家体制や家族制度などの社会構造の変化や、女性の自立を目指す動きに合わせ、真の姿が描かれるとともに、深くまで女性の内側をとらえる描写がなされるようになりました。また大正から昭和にかけて大きく進んだ西風化の波の中で取り入れられていった洋風の衣装や調度品などに囲まれた女性たちの今までは見られなかったモダンな美しさも表現されるようになりました。またこの時代から帝国主義が進み、旧来の日本の風俗や風景の中だけではなく、中国大陸や朝鮮半島、沖縄といった国外の女性たちの美も描かれるようになりました。

それまでにはなかった日常生活や歴史、文学や芸能などといったテーマを設けての女性の姿を描き出すことも行われるようになり、裸婦や母子像といった形により、フォルムを追及するという新しい形での女性の美の描写も行われるようになりました。

また特筆すべきこととして、平安京の時代からの「京」であった京都には千年の歴史と文化があり、風俗な

ども他には見られないものが多くあります。それらの中で育まれてきた土壌の下、京都画壇では「美人画」が盛んに描かれてきたということがあげられます。

この展覧会では、昭和八年（一九三三年）十一月に昭和天皇の即位を記念して「大札記念京都美術館」として設立された京都市美術館が開館当初から収集してきた明治以降の美術の変遷とその特色を反映した京都画壇を中心とした作品のコレクションから、明治、大正、昭和にかけての様々な社会の変容や多様化する美術の動向が鋭く感じられる「美人画」の名品六〇点をご覧ください。



上村松園《晴日》昭和16年(1941)京都市美術館蔵

会期：平成29年4月8日(土)～5月21日(日)

平成二九年度開催の展覧会

京都市美術館名品展

京の美人画一〇〇年の系譜

四月八日(土)―五月二日(日)

前頁参照

家康の肖像と東照宮信仰

六月三日(土)―七月一七日(月・祝)

岡崎市は徳川家康の生誕地です。江戸幕府を開き、天下泰平の礎を築いた家康の肖像は数多く残されていますが、その姿は生前の家康を描いた画像をはじめ、没後に神格化され、祭祀に用いられた東照大権現像、三代將軍家光の夢に現れた家康の姿を描いた霊夢像など多岐にわたります。本展では徳川記念財団の所蔵資料を中心に、京都知恩院をはじめ家康ゆかりの地の東照宮や寺社に伝わる家康の肖像を展示し、その変遷をたどるとともに、太平の世を支え続けた歴代將軍の肖像画を一堂に会し、その真の姿に迫ります。さらに大樹寺や瀧山東照宮など県内各地の東照宮や家康ゆかりの寺社などの所蔵資料により、東照宮信仰とそのひろがりについて考えます。

浮世絵を愉しむ ―歌川国芳《通俗水滸伝豪傑百八人之一個》を中心に―

七月二九日(土)―九月一〇日(日)

江戸時代、中国四大奇書の一つである『水滸伝』は、曲亭馬琴の『傾城水滸伝』などさまざまな翻案され、大衆の間で一大ブームとなりました。本展では、武者絵の名手として名高い歌川国芳(一七九七―一八六二)が手がけた、『水滸伝』に関する浮世絵作品をご紹介します。なかでも『通俗水滸伝豪傑百八人之一個』は登場人物を一人ずつ画面一杯に描くという、それまでの武者絵にはなかつた描き方で、豪壮でありながら細やかな表現が駆使されています。国芳渾身の作品を通して、傑作『水滸伝』の魅力、そして浮世絵の魅力をご堪能ください。

COLUMN & TOPIC

ウェールズ国立美術館所蔵

ターナーからモネへ

九月二三日(土)―二月二日(日)

本展では英国・ウェールズ国立美術館のコレクションから、風景画・肖像画・風俗画など、十九世紀のイギリスとフランスを中心とした約七〇点を超える多様な作品を展覧し、西洋絵画の変遷を辿ります。ターナーやコンスタブルといった印象派の先駆的動向にあるロマン主義をはじめとし、写実主義を代表するコロッセーやミレー、印象派のモネやルノワール等の作品、さらにセザンヌら後期印象派に至るまでの作品をご紹介します。またロンドン・ロイヤルアカデミーで展示を行ったホイットスラーなどに加えて、パリ・サロンで活躍した画家たちの作品もご紹介します。

三河の秋葉信仰 ―火伏の神の系譜―

二月二五日(土)―平成三〇年二月一四日(日)

秋葉山(浜松市)は火伏の靈験あらたかとして、江戸時代に三河・遠江を中心に広く信仰を集め、今なお各地で祭礼や秋葉山への参詣が行われています。そのあり方は古文書や浮世絵、現代にのこる常夜灯や民俗事例などからうかがえます。本展では岡崎市内の寺院に祀られてきた秋葉三尺坊大権現像の約一〇〇年ぶりの御開帳や、秋葉山本宮秋葉神社所蔵の重文の太刀の公開などをはじめ、東海地方に伝わる貴重な資料を基に、三河の人々の心に今も息づく秋葉の信仰とその歴史を紐解いていきます。

暮らしのうつりかわり

二月二七日(土)―三月二五日(日)

美術博物館が所蔵する民具を中心に紹介しながら、私達の暮らしがどのように変わってきたのかをたどります。古い生活・生産道具など寄贈資料の公開・活用のもとともに、この時期の公立小学校三年生の社会科「古い道具と昔のくらし」への学習支援を兼ねて、子ども達の見学に配慮した内容と工夫を凝らします。今と昔の生活の違いや変化、昔の人達の生活の知恵を再認識する場となればと考えます。

南紀花岡先生整骨並卷木綿秘事図

浦野加穂子

江戸時代後期、蘭学を中心とする洋学の普及とともに、西洋医学の習得を目指し、蘭方医塾等に入門する者が岡崎地域にも現れました。高須村(福岡町)の岩瀬敬介(一八〇四―一八〇五)もその一人です。敬介は文政十二年(一八二九)に二六歳で紀州の華岡青洲の学塾「春林軒」に入門し、四年間、華岡流の外科を学びました。

華岡青洲(一七六〇―一八三五)は漢方の知識を生かして生み出した麻酔薬「通仙散」と蘭方の外科という、東西の医学を融合させることにより、世界で初めて全身麻酔による乳癌の外科手術を成功させたことで知られ、青洲のもとには全国から一八〇〇人を越える門人が集まったと伝えられています。三河からも敬介をはじめ、岡崎の神田梅三、大岡村(安城市)の堀尾堯民、鷲塚(碧南市)の近藤安中など十二人が入門しています。

敬介は帰郷後に外科を主として開業し、二代敬齋も弘化二年(一八四五)に華岡門に学びました。岩瀬家には、青洲が敬介に授けた自画像や書をはじめ、華岡門の入門者を書き上げた「華家門人録」、敬介が修学の

内容や薬の処方などを記録した「南紀雑記」のほか、『解体新書』の初版本、「青洲先生医談」などの貴重な医学書、伝書が多数伝わっており、多くの資料が平成二七年度に当館に所蔵されました。

「南紀花岡先生整骨並卷木綿秘事図」は敬介が華岡門で四年間学んだ後に授けられたものです。顎関節脱臼の整復法にはじまり、頸椎損傷に対する牽引法や数々の包帯法などが巧みに図解されています。箱書に「華岡青洲先生秘伝之図」とあり、同箱に収められた「外科秘事」には様々な腫物の症状や手術図などが描かれています。敬介は当時最も進んだ外科術を、岡崎地方の村落部に広め、近代医学の草分け的役割を果たした人物として特筆されます。



私の心象資料

COLUMN & TOPIC

家康研究の最前線

——ここまでわかった「東照神君」の実像 堀江登志実

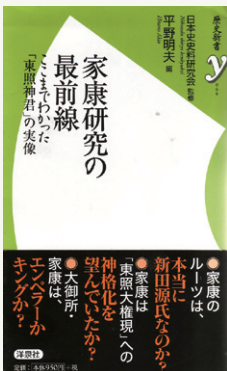
家康研究の現状、さらには家康研究の魅力を一一般の方に知ってもらうために、その内容をコンパクトにまとめたのが本書です。編者は國学院大学兼任講師の平野明夫氏で、最新の成果や、新たな考察にもとづくものを、できるだけわかりやすくというのが編者の方針です。第一部は戦国大名への道、第二部は戦

国大名徳川家康、第三部豊臣大名徳川家康、第四部天下人徳川家康、と家康の人生を四部に分け、あわせて十五の論考が配置されています。著者は十四人の研究者で、自分の持ち味を生かしながら論を展開しています。第一部には平野明夫氏のほか中京大学教授村岡幹生氏や同朋大学准教授安藤弥氏など、当館が二〇一五年家康没後四〇〇年祭で開催した講演会「三河時代の家康を考える」で講師やコメントーターを勤めていただいた方の論考も収められています。家康のルーツである松平八代についての村岡氏(松平氏「有徳人」の系譜と徳川「正史」のあいだ)、人質時代の家康についての平野氏(家康は、いつ、今川から完全に自立したのか)、安藤氏(三河

書籍紹介

一向「揆」は家康にとってなんであったのか)は講演会の時や対談などでも話題になった内容にふれているものもあります。自慢ではないですが、家康の譜代家臣の形成についての筆者の論考も収録されています。家康の生誕地である岡崎市には、戦前には柴田頭正氏による「徳川家康と其周囲」、戦後には新行紀一氏による『新編岡崎市史』という家康研究の上でも非常に高い評価を得ている財産があります。そのことは本書のなかにもふれられており、私どもの誇りでもあります。今後家康研究のうえで存在感のある業績を岡崎市でも期待したいと思

いますが、本書がその一助になれば幸いです。



洋泉社歴史新書

INFORMATION

■平成28年度収蔵品展

暮らしのうつりかわり

平成29年2月1日(水)～3月26日(日)

■子どもわくわく!教室

日時:2月4日(土)・2月11日(土)・2月18日(土)・2月25日(土)・3月4日(土)

午前10時30分～

■ギャラリートーク

日時:2月18日(土)・3月12日(日) 午後2時～

■平成29年度企画展

京都市美術館名品展 京の美人画100年の系譜

日時:平成29年4月8日(土)～平成29年5月21日(日)

■講演会

「京都の美人画の歴史」

日時:4月15日(土) 午後2時～

講師:尾崎真人氏(京都市美術館学芸課長)

■高田啓史氏によるスペシャルギャラリートーク

日時:5月7日(日) 午後2時～

講師:高田啓史氏(小紋屋高田勝主人)・荒川貴夫氏(くすや呉服店店主)

■ギャラリートーク

日時:4月16日(日)・4月29日(土)・5月3日(水・祝)・5月5日(金・祝)・5月13日(土)・5月21日(日) 午後2時～

年間パスポート[Museum-pass]好評販売中!

・一般3,000円 ・ペア2,000円 ・学生2,000円

○ペアは一般会員と同時購入する同居家族の方

○パスポート会員限定のイベントや、図録購入割引、提携施設の割引や継続購入の方の割引、新規購入の方には当館で過去に開催した展覧会図録(一部除外あり)のプレゼントなど、素敵な特典がいっぱいです!

展覧会限定リミパス[Limi-pass]も販売中

“この展覧会だけ何度でもみたい”という方にオススメの限定フリーパスです

○展覧会により価格等が異なります。

例)暮らしのうつりかわり展-400円、京都市美術館名品展-1,500円

○パスポート会員限定のイベントなど、年間パスポート[Museum-pass]の特典は対象外です。

※詳しくは当館までお問い合わせください。

ペンとリンゴとダリ

過去最大級とされるダリ展が昨年七月から年末まで京都と東京で開催され六〇万人以上を動員、その人気の高さを誇示した。

ダリといえばピンとはねたヒゲをトレードマークに、自ら天才と言いつち、TVコマーシャルに目を回す仕草で登場するなど、エンタテナーとしての認知度も高い。だが実際には聡明潔癖、真面目で職人気質な画家で比類なき画力を持つ。デペイズマンと呼ばれる唐突な物を登場させる幻想的画風で世を風靡し、テレビの普及に伴い自ら出演してパフォーマーの先駆けとなった。

二十一世紀の今日、メディアはテレビからインターネットへ取って代わった。ダリ展開催と時を同じくして、軽妙な音楽で歌いながらペンをリンゴに突き刺す仕草で踊るアーティスト(?)がネット動画から世界中で大ブレイク。ヒゲをたくわえた軽妙な所作は半世紀前のダリの姿と重なる。ペンとリンゴの組み合わせはデペイズマンのようで面白いが大衆の関心はいつまで続くのか。数ヶ月で大スターにのし上り、瞬く間に忘れ去られるという、熱狂と廃忘が世界規模で起こる時代。

だが実のあるアーティストはダリの例を見ても明らかのように、その人気は衰えるどころか高まっていくものだ。(村)

おしゃべり、あれこれ。

ご当地ものの色々

ご当地もの、と聞くと思い浮かぶのは食べ物やキャラクターですが、他に「ご当地小説」なるものがあることを、先日訪れた城崎温泉で知りました。歴史ある温泉街として知られるこの地域では、地元の方々が高上げたNPO法人が、城崎温泉を題材とした小説を地域限定で売っています。現在、志賀直哉の『城崎にて』とその解説編の他、万城目学『城崎裁判』、湊かなえ『城崎へかえる』と人気作家による書き下ろし作品が出版されています。内容が魅力的なのは勿論のこと、装幀がとても洒落ています。『城崎にて』は品の良い簡潔なデザインで、作家の文章表現の魅力が表れていますし、他二冊は、城崎温泉の代表である温泉と蟹をそれぞれテーマにしたユニークな装幀です。

この様に魅力的なご当地小説が各地で生れれば、買いに訪れる方も多くいらつしやいそうです。本市でも東海、愛知に縁のある作家やデザイナーを起用して、徳川家康の出生地という従来のアピールとは全く異なるテーマでなにか面白い小説が出来ないでしょうか?仕事そっちのけで妄想は膨らみますが、自分が担当する展覧会も、市が収蔵する作品を展示するという点でご当地ものの一種と言えます。まずはその準備に邁進しなければ、と思い直しました。(菊)

編集後記 | 当館で行われる美術展で、名前も知らなかった作家の絵に眼を奪われる。そんな体験を時々します。来年度も趣向の異なる6つの展覧会を企画しています。それぞれ国内外、館内の優品が集結する展示となっています。年間パスポートを手に、意外な発見の旅に来てみませんか。(湯谷)

表紙図版:手回しミン(シンガー社、昭和10年代使用)



開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術館ニュース/アルカディア] 第69号 2017年2月発行

編集・発行 岡崎市美術館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術館

<http://www.city.okazaki.lg.jp/museum/index.html>

ARCADIA